

近世前期の東国文献について

田 籠 博

現代日本語の研究が共通語を出発点とするのは当然であろうが、その基盤になった東京語の歴史には未だ解明されていない部分が多い。たとえば東京語の前身をなす江戸語の言語体系が文献上確認できるのは、せいぜい近世中期以降のことで、断片的記事を除けば、初期の実態をうかがうことのできる文献はごく僅かにすぎない。さらに、江戸語の基本的性格を形づくったと推測される所謂東国語に至っては、事情は殊に厳しい。

周知の通り、この悪条件の中にあつて、ヤソ会士J・ロドリゲスの『日本大文典』には、諸国方言のひとつとして「関東、又は阪東」の項があり、重要な点はほとんど指摘されている。一方の国内文献では、下級武士の戦陣訓と言われる『雑兵物語』があり、ペイ詞に代表される様な東国語らしい様相を示している。いずれも重要な資料ではあるが、それぞれに問題を含んで居り、他類の文献による裏づけが必要とされていた。

そこで注目されだしたのが、関東の地で作製された抄物と呼ばれる聞書の類である。曹洞宗関係の抄物は洞門抄物と称されて、近来著しい研究の進展をみている。ところが、洞門以外にもこの種の抄物はあつて、京都大学蔵『妙統大師語録抄』（国語国文24の11、池上論文参照）と春日和男先生蔵『五逆秋（無門関抄）』（文学研究61、春日論文参照）とが知られており、共に浄土宗の僧円応が慶長年間（160初頭）に作製したものである。

この浄土僧円応の抄物を調査してみると、従来洞門抄物について指摘されてきた六項目の言語上の特色、即ち(1)助動詞ダ、(2)助動詞ヨウ、(3)形容詞連用形原形、(4)ハ(ワ)行四段動詞連用形の促音化（ex 食ッテ・思ッテ）、(5)条件句ウニハ、(6)敬意を含む命令語尾シ、サシのすべてを満たしており、この点で洞門抄物と同様の資料たりうる事が分かる。しかし、その一方で、洞門抄物では例外的にしか現れない指定辞チャが多数あり、簡単に同じとする訳にも行かないのである。

一般に関東側の抄物が示す言語相は、右の六項目の如き特色があるにもかかわらず、きわめて京阪語的色彩の濃いものであつて、(3)、(4)両項目などは有力な対立形（ウ音便形）が依然として存在する。また(5)、(6)の如きは、どれだけ実際の口頭語を写しえているかに疑点があるのであつて、抄物の言語を『雑兵物語』のそれと結びつけるには困難が多い。特に助動詞ヨウなどは、抄物が結局は知識層の言語を拠り所にした所以と解釈せざるをえない。円応の抄物におけるチャも、こうした視点からの解釈が必要とされる。その為には、洞門抄物以外の抄物を発掘する期待が持たれる訳である。